

# 上賀茂地域の活性化を目指した住民との協働による ジュニア上賀茂検定に関する研究

平成 24 年 4 月 3 日受付

勝 矢 淳 雄\*

キーワード：上賀茂地域，ジュニア上賀茂検定，地域の活性化，地域貢献活動，住民との協働

## 1. はじめに

従来、小学校の教育と地域とはほとんど関連なく行なわれてきたが、総合学習の時間が設定されて地域についての学習も取り入れられるようになってきた。上賀茂小学校では、地域の古老などの話を聞いたり、伝統行事の紅葉音頭を地域の方々に教えてもらうなどの試みも行なわれてきた。ただ、必ずしも計画的に行なわれているわけではなく、各学年への申し送りも必ずしも十分ではなく、毎年続けていくのが難しいこともあった。また、小学校と地域のかかわりが少ないために、小学校には内容に見合った適切な住民を探す伝手もないために地域の一部の人達のみにも頼ることとなり、マンネリ化の傾向にもなっていた。

一方、1300 年以上の歴史があり多くの伝統行事や伝統文化がある上賀茂地域も、近年の住宅開発によって居住してきた既に 5 割を超えた新しい住民や上賀茂に嫁いできた若い世代の住民にとっては、地域のことを知る機会も少なく、さらに古くからの伝統行事などには新しい住民は物理的・精神的に参加が難しい状況にもある。これが伝統行事などを徐々に衰退の方向に向かわせており、また地域の活性化のための活力を低下させることにも繋がっている。古くから居住し伝統行事に関わっている住民は、新しい住民を地域に取り込んでいく何らかの改革の必要性をことあるたびにそれぞれ口にはするが、古くからの因習に捉われたり、危機を感じながらも積極的なアイデアもそれを推進するリーダーも現れないために何らの手も打てないままに参加者が減少しているのが現状である。端的な例がさんやれ祭である。かつては上賀茂の 8 つの町内の明治以前から上賀茂に居住している農家の子供を中心に行われてきた。少子化によって合同して現在は 5 つとなったが、さらに減少を目前にしている。「上がり」と称する主役となるべき 15 歳の児童がいない場合もある。しかし、生まれた時から参加するのが原則であることや、もっと基本的には祭自体を知らないこともあり新しく居住してきた住民の子供たちが参加することはほとんど不可能である。古くからの住民にとっては、さんやれ祭を自分たちだけで維持していることが誇りでもあるが、遠からずして祭自体が困難となるであろう。六歳念仏<sup>1)</sup>も書の加茂流も既に途絶えた。

---

\* 京都産業大学理学部

古くからの住民から新しい住民までが、地元である上賀茂地域に愛着と誇りを持って協調していくためには、古い伝統を維持していくだけではなく、何らかの目に見える形での新たな試みを行い、多くの住民が互いに共有し実感しうる基盤を作ることが必要である。とくに、次の時代を担うべき子供たちには、早くから地元である上賀茂の伝統行事や伝統文化を学び、関心と興味そして愛着を持てるような試みを地域ぐるみで行うことが大切である<sup>2)</sup>。

このような新たな試みの例として京都検定(京都・観光文化検定)<sup>3)</sup>がある。京都検定はその斬新なアイデアが社会の注目を浴び、受験生が多数になり京都への関心を今まで以上に高めた。それ以来、全国的にご当地検定やそれぞれの専門分野などにおける検定が雨後の竹の子のように始まりだし、検定ばやりになっている。これは、検定という形での一定の知識の習得が、社会の多くの人々の共感をよび勉強意欲を刺激し、興味を持って試みられるようになったことによっている。検定の社会的な影響は大きなものがある。このような検定を通じて地域のことを知るのを最も必要としているのは、次代を担う子供たちである。少しでも早く地元の事を知り、地元へ愛着を持ってもらわなければならない。子供たちは検定のようなクイズが好きであることも好都合である。

地元の事を知ることが、地元へ愛着を持つための基本であることは言うまでもない。ところが、新しい住民のみならず、古くからの住民も自分に関連すること以外、案外地元のことを知らないのも事実である。また、興味や関心はあるが、何処から手をつけたらよいのか分からずに手をこまねいていることもある。まして、子供たちにとっては教えてくれる人も適当な参考書もないのが現実である。

以上のような背景の基に、京都検定をモデルにしてジュニア上賀茂検定を上賀茂小学校3年生の児童を対象にして実施した<sup>4)</sup>。その結果、子供たちはもとより担任の先生方、手伝った保護者の若いお母さん方には上賀茂の事がよく分かったと大変好評であったし、また、説明に当たった地元の方々も生き活きと説明されているのも大変印象的であった。古くからの地元の方も改めて上賀茂のことを学んだようであった。ジュニア上賀茂検定は予想以上の成果を挙げる事ができた。その経緯と結果を考察する。

## 2. ジュニア上賀茂検定の目的

ジュニア上賀茂検定を一つのテーマにして、従来からの総合学習の地域の学習を包含して、多くの行事を実施することによって地域学習の一つのまとまりを作ることを目的にしている。さらに、その波及効果として地域の各種団体間の協力関係の構築を目論んでいる。

すなわち、

- ① 子供たちの育成。上賀茂地域の将来を担う子供たちに地元への関心と興味、そして愛着を持ってもらう。
- ② 多くの団体間の協力体制を構築する。上賀茂地域には多くの団体があるが、それらの関係は少ない。とくに、かつての神社の社家である同族会と農家を中心とする自治連合会とは一緒に活動することはありえなかった。著者が仲介して魯山人生誕地石碑建立で初めて連名となったのは画期的な

- 出来事であった。小学校と自治連合会との関係もいままで直接的な関連は薄かった。さらに、従来関連の薄かった自治連合会と、PTA やおやじの会などの小学校関連団体との協力関係を構築する。
- ③ 若い保護者にも地域のことを知ってもらう。新住民が5割を超えた状況になりながら、若い保護者に地域を知ってもらう機会が少なかったが、子供通じてまた上賀茂発見ラリーなどに協力してもらうことや講演会を催すことを通じて地域のことを知ってもらう機会を作り出す。
  - ④ 古くからの住民にも改めて地域のことを知ってもらう。案外、古くからの住民も自分に関わることで以外、地域のことを知らないのが現状であったので、色々手伝えることは地域を知るよい機会になる。
  - ⑤ これらを通じて、地域の伝統文化・行事の継承・発展を図る。

### 3. ジュニア上賀茂検定の経緯

- 1) 平成20年1月に、著者と下鴨地域のK氏との間で、賀茂地域について地元の人達にも理解と愛着を深めてもらうために「賀茂検定」を実施しようとのことで意見がまとまった。具体的には、種々の問題点についてE-メールで相談し、下鴨神社と下鴨神社青年会、ボーイスカウトなどとの協力を得て進めるとのことになり、同年3月に下鴨神社で第1回の会合をもった。色々の問題が出された。たとえば、下鴨神社青年会は1年間の活動計画のもとで活動をしているので、その計画にない活動には協力し難い、下鴨神社と上賀茂神社との関係、ぐずぐず会議などやるよりさっさと具体的なことをやったらどうかなどであったが、全般的には好意的な雰囲気のもとに終了した。
- 2) その後も数回の会合がもたれたが、いくつかの点が指摘された。1つは、「賀茂検定」と言う言葉が既に使われていることがわかり、これには色々な案が出されたが「賀茂学検定」と言うことで結着した。難題が神社側から出された。即ち、賀茂学検定と名乗る上には、上賀茂神社が関与していなければおこがましく、それであれば「下鴨検定」でなければならないと言う意外な発言で真意が計りかねるものであった。内容としては理に叶ったことであるが、上賀茂神社と下鴨神社とは千年以上にわたって仲は良くなく、上賀茂神社の宮司が変わってつい2、3年前に両者の宮司が行き来をするようになるまで、ほとんど関連せず生きていた。まだ、両社の多くの神職の間には長年のわだかまりが今でも引き継がれているように感じられる。このような両社の状況と、農業の水争いが古くからあり、江戸時代を通じても幕府に訴えがなされてきた経緯があり、住民同士もいまだに疎遠な状況である。個人的に両社あるいは両地域に関連がある人も、そのことを他の人にはまったく話をしないのが現状である。

議事録も最初は素案が出されたが、幾つかの修正をお願いしたら、次からは素案も出されなくなった。要望したところ議事録は作成していないと拒否されるようになった。

- 3) これを受けて、下鴨のK氏と著者の二人で、上賀茂神社の田中安比呂宮司と面会し協力の了解をえた。ところが、その後の会合でさらに、下鴨神社側から難題が出された。すなわち、上賀茂の社家の賀茂県主同族会(以下、同族会)と上賀茂自治連合会(以下、自治連合会)の協力を取り付けな

ければならないとの主張であった。これは、上賀茂地域と下鴨地域の従来からの反発、同族会と自治連合会の従来からの関係を考えれば、あまりにも無理な要求であることは明らかであった。上賀茂にはこのような要求をしながらも、下鴨地域では、下鴨自治連合会の了承を取り付けていないし、下鴨神社の社家の集まりである始祖会の了承も取っていないわけであり、上賀茂地域のみにもこのような要求をすることは明らかに理不尽であった。その他、次々と細かいところにも異議が出されるなどであった。下鴨神社あるいは関連者は、「賀茂学検定」を上賀茂地域とやりたくないが、反対するのは今後のことを考えると都合が悪いのでわざと無理な要求をして潰そうとしていると考えざるを得ない状況となった。何回かの会議の後のある会議の冒頭に「この会議は一体何の会議か」という発言が神社側から突然出されなどは、まったくの噴飯ものであった。

- 4) 一応、同族会に事情を話したが下鴨神社と協力してやることは出来ないと、具体的に最近のある事例を挙げての強い拒否の返事であったし、自治連合会も難色を示した。「賀茂学検定」については上賀茂地域の協力を得ることは出来なかった。これを受けて次の幹事会で、上賀茂地域ではまずジュニア上賀茂検定をはじめ徐々に雰囲気づくりを進めると提案した。下鴨神社と下鴨神社青年会は、我々の方は中断している講演会を復活することから始めるということになり、賀茂学検定委員会は解散することとなった。その後、下鴨神社青年会は「秀穂塾」という名称で平成 21 年に講演会を始めた。

著者は、上賀茂地域の住民ではないので、中立の立場と考えていたが、下鴨地域の人たちにとっては上賀茂で活動をしている上賀茂のものともみられる著者が主導的に推進していることに不快の念と反発を感じているようであった。従来からの両地域の疎遠さ、あるいは仲の悪さ、いがみ合いなどの潜在的なわだかまりが根底にあるように思われる出来事であった。千年以上の対立がすぐに解消できるとは考えてはいなかったが、予想以上の根強い対抗意識と反発であった。ジュニア上賀茂検定として子供対象の検定から始めようとしたのは、将来的には大人向けに上賀茂、下鴨の両地域のみならず全国の賀茂地域を対象にした「賀茂検定」を実施したいということにもあった。

- 5) 以上のような前提があり、平成 20 年 9 月に、ジュニア上賀茂検定趣意書を作成し、「ジュニア上賀茂検定」を自治連合会の幹部の H 氏に相談したが、「会長に言ってくれ」とのことで取り合ってもらえなかった。丁度、北大路魯山人生誕地石碑について活動を進めているさなかであった。自治連合会会長の F 氏に話をしたところ、ジュニア上賀茂検定の話にはあまり興味は示してもらえず、自治連合会内部のトラブルの話を書くのが主となってしまった。数ヶ月前から、会長と幹部連との間にある事項に関して深刻な意見の食い違いがあり、両者の関係が難しくなりだしていた。自治連合会になぜ話をするかということであるが、上賀茂地域を包括する団体であり、できるだけ多くの地元住民を巻き込んで、地域のことを考える切っ掛けにもしたいし、達成感を味わってもらいたいとの配慮からであった。
- 6) 自治連合会内部のトラブルと北大路魯山人生誕地石碑建立のことが多忙となり、ジュニア上賀茂検定の話は一時中断せざるを得なかった。平成 21 年 3 月に魯山人生誕地石碑除幕式が終わり、平成 21 年

- 4月に自治連合会は会長をはじめ新しい体制になった<sup>5,6)</sup>。
- 7) 平成21年7月29日：後にワーキンググループの中心となる自治連合会などの5名と著者でジュニア上賀茂検定について、進め方と組織、問題などの内容、神社や同族会との関係、助成の申請などについて協議した。とくに、小学校校長、PTA、おやじの会、小学校学校連絡協議会の協力をどの様に得るか。PTAなどを通じて新住民を取り込むことができるか。問題を作成のために、上賀茂地域での分からないこと、疑問点、びっくりした事、知りたいことなどを集めるため、さしあたり各自が知っていることを書き出すなどを話し合った。しかし、現実には誰も実行しなかった。
  - 8) 平成21年8月25日：ジュニア上賀茂検定の上賀茂地域での実施についてのある程度の骨格ができ、また自治連合会が新体制で一段落したので、新しい自治連合会会長のN氏のところに行きジュニア上賀茂検定について協力を依頼した。子供たちに上賀茂について知ってもらい、興味と関心そして愛着を持ってもらえるようにしたいとの趣旨に賛同してもらえた。これをもとに、著者は改めて趣意書を作成して自治連合会幹部のH氏に渡した。
  - 9) 平成21年9月3日：自治連合会役員会でジュニア上賀茂検定について話し合いをしてもらい、全員賛成だったとの結果で自治連合会もジュニア上賀茂検定に参加することとなった。自治連合会も新しいメンバーとなり、何らかの活動を始めたいと考えているときでもあった。自治連合会などを巻き込んで推進する理由は、地域の出来るだけ多くの住民に関心を持ってもらい、ジュニア上賀茂検定を基盤にして地域を考える機会にしたいからである。実際、その後の検定委員会では地元の主要な団体をすべて協力団体として参加してもらった。
  - 10) 平成21年9月4日：上記を受けて、ジュニア上賀茂検定委員会案(顧問、委員、ワーキンググループ)を作成し、自治連合会幹部のH氏に渡した。
  - 11) 平成21年10月24日午後7時30分から8時40分まで、上賀茂消防会館で第1回ジュニア上賀茂検定準備会を開いた。自治連合会を主体にして関連の人たちに声を掛け自治連合会会長など8名と著者と協議した。役員の方針、どの団体に声を掛けるか、全般的な方針、小学校の協力の要請(小学校のY校長への打診)、とくに、対象学年、小学校の土曜学習での実施、ジュニア上賀茂検定の中級、上級編の実施、表彰方法、PTAなどを通じての若い層の取り込み、学習会(講演会)の実施など多くのことを話し合った。農家を主体とする自治連合会に対して、社家の集まりである同族会理事長にも顧問の形で参加してもらおうことで同意をえた。
  - 12) 子供たちを対象にするので上賀茂小学校の協力が得られることが大切で、土曜日に希望者を募って実施する土曜学習などを想定して、自治連合会のF氏などが上賀茂小学校のY校長に打診したところ大変興味を示してくれた。
  - 13) 平成21年11月9日：上記を受けて、上賀茂小学校で自治連合会関係者と著者との3名でY校長と協議した。Y校長からは総合学習の正規の授業に取り入れて実施したいとの積極的な提案がなされ、我々も当然賛成であった。学年の段階的な学習のために3年生を対象にしたいとの提案であった。3年生では少々難しすぎるのではと協議したが、最終的には学校の方針に従って3年生で実施

することで了解した。組織の話が出て、Y校長からジュニア上賀茂検定委員会を上賀茂小学校学校運営協議会の下部組織にしてほしいとの要望が出された。著者は了承したが、自治連合会関係者は難色を示して再度協議をすることとなった。ジュニア上賀茂検定委員会には社会の担当と総合学習の主任に参加してもらう予定となった。しかし実際には、夜の会議になったためかY校長が出席し、上記2名は参加しなかったために、その後、小学校と委員会で作業分担が明確にならず種々のことで行き違いが生じることにもなった。

- 14) 平成21年11月14日に、上賀茂神社の田中安比呂宮司と自治連合会2名と著者で会い、ジュニア上賀茂検定の基本的な内容について説明し、顧問就任と、神社のT氏の委員就任の了承を得た。また、将来は全国の賀茂地域で同様のジュニア賀茂検定を実施し、さらにそれらを基盤にした大人向けの賀茂文化検定を実施することに賛同を得た。
- 15) ジュニア上賀茂検定委員会は、ジュニア上賀茂検定のみならず、さらに全国の賀茂地域の大人を対象にした賀茂検定を視野に入れているため、どのような規約にするかについては様々な意見があり自然に発生した仮のワーキンググループで検討したが、なかなか意見の一致をみることができなかった。抽象的な方針についての意見の違いはなかったが、たとえば、規則の作り方に自治連合会レベルの小さな会と全国的な会の規則の作り方の違いなどであった。自治連合会の幹部は地域レベルの規約しか知らないで、説明しても最初はなかなか理解をしてもらえなかった。会合とEメールで調整を図り著者の考えを基本にして纏めることができ、12月9日に仮のワーキンググループの案が決まった。自治連合会幹部と著者の視点や将来ビジョンの違いが表に現れた最初であった。
- 16) その間、上賀茂小学校の副校長から、一度どんな様子になるかを試してみたいとの申し入れがあった。見学地点と問題は小学校で作成するので、12月19日に案内をお願いしたいとの話であった。急なことで対応に困ったが、こちらの実力を試したいという意図も薄々感じられた。著者らの都合を聞かずに、また自分たちが地域のことを知らないにかかわらず、自分たちの指示で物事を動かすのが当然と考えている節があり、一抹の不快感があったが引き受けることとした。社家の見学会など従来から作成していた冊子に追加・手直しをして27頁の冊子を作成した。後日、Y校長からは自分の日程を聞かずに決められたので参加できなかった旨の話があった。
- 17) 平成21年12月19日に、小学校からの募集(土曜学習)で集まった小学生15名(4年生~6年生、3年生の参加はなし)と教員3名に自治連合会関係者4名と著者で、9ヶ所の地点で著者が説明し、1時間後に小学校に戻り12問の3肢択一の検定問題を解いた。興味を持って集まった児童と言うこともあり熱心で、ほぼ半数が全問正解という結果になった。不正解が出たのは、見学場所とは関係ない祭についての問題があったためで、小学校が見学会とは関係なく勝手に作ったからであった。前もって問題を見せてもらえたら対応の方法もあったが、まったく無視されていた。全般的にみると3年生では少々無理であり、5、6年生が適当との印象を受けた。この際、小学校の先生方の採点の速さにはびっくりさせられた。このこともあり後日、ジュニア上賀茂検定の採点は小学校にお

願いすることとなった。27頁の冊子は、今までの著者の活動を知らない小学校の先生方は内容の豊富さにびっくりしたようであった。著者が十分な対応が出来たので、その後、自治連合会関係者が小学校に行くと教員の対応が変わったとのことであった。ジュニア上賀茂検定に向けての階段を一步上がることができた。(写真1)

- 18) 平成21年12月22日に、第2回の準備会を上賀茂消防会館で開いた。自治連合会関係者9名、Y校長、著者の12名であった。Y校長との協議結果、規約案、上賀茂神社の田中宮司との協議結果、12月19日の見学会、委員会のメンバー案、具体的な実施計画、予算、小学校との作業分担、発展コースの予定などを報告・協議した。上賀茂小学校運営協議会の下部組織にしてほしいとのY校長の要望については、ジュニア上賀茂検定委員会の組織の方が大きくなって運営協議会の下部組織としては入りきらない



写真1 土曜学習での見学会

- ことから運営協議会からも委員を出してもらい、協力して推進しているとの形にしたいとのことで意見がまとまった。同族会のN理事長からも賛意のE-メールが来たことを報告した。小学校を今年退職されたS先生が地域の学習に大変熱心だったし、児童の学力レベルもわかるので都合だとのことで、自治連合会幹部のH氏を通じて協力を打診することになった。後日、S先生からは、しばらく休ませてほしいとのことで不参加となった。この後、自治連合会を中心とした5名と著者を合わせた6名のほぼ公認となったワーキンググループで種々の前相談をするようになった。
- 19) 平成22年1月14日、上賀茂小学校で、ワーキンググループ6名とY校長と具体的な実施の方針について協議した。学習過程の都合で3年生に実施したい、ジュニア上賀茂検定の前に上賀茂の各地点に回って説明を聞く上賀茂発見ラリーを実施し実際にものを見て勉強する機会を作りたい、検定は11月にやりたいなどがY校長から提案された。基本的に了承して準備会を開いて協議することとなった。
- 20) 平成22年1月28日に、上賀茂消防会館で第3回の準備会を開いた。自治連合会関係者から6名、上賀茂小学校運営協議会から1名、上賀茂小学校おやじの会から4名、上賀茂神社のT氏と著者の合計13名であった。Y校長は、明るる日の授業参観の準備のために欠席であった。おやじの会から突然参加があり問題はないがいつ承認され誰が声を掛けたのか著者は知らなかった。自治連合会の誰か(H氏と思われる)が勝手に動かしているようであった。1月14日にY校長と話し合った内容を補足して説明・協議した。来年度実施の案と学習の流れを検討し了承した。委員会の顧問、協力団体、委員などの案がほぼ決まった。同族会のみまだ返事がないので、著者が文書で依頼することとなった。著者以外で同族会に声を掛けることが出来る人がいないことと、自治連合会関係者

はむしろ自分たちだけあるいは自分たちの力の及ぶ範囲内だけでやりたいと思っているが、著者は地域のみんで協力する形を作ることに重点をおいていた。

- 21) 平成 22 年 2 月 19 日に、ワーキンググループの 6 名で集まり、3 年生の問題作成の基本的考え方、ジュニア上賀茂検定の発展コース、応用コースの詳細、7 月の上賀茂発見ラリーの具体的な地点や方法、解説書の作成などを検討した。上賀茂発見ラリーから検定までの期間が 4 ヶ月も間が空いては、覚えた事柄を忘れてしまうのではとの意見が出され、Y 校長に伝えることとした。各地点の説明員は人数的には自治連合会関係者などで出せると思うが、説明内容については学習会が必要とのことであった。
- 22) 平成 22 年 3 月 8 日に上賀茂小学校で、ワーキンググループ(5 名)と Y 校長とで協議した。Y 校長から小学校の職員会議でジュニア上賀茂検定の実施が正式に決まったことが報告された。2 月 19 日のまとめを中心にして一連の行事の進め方などについて意見を交換した。上賀茂発見ラリーと検定までの期間が空くことについては検討するが、学習会など何なりと方法はあるとのことであった。その他、行事は映像で見せたらよいなど多くの発展的意見が出されたが、一方で誰が実際にやるのかなどについては全くの目算もない話であった。
- 23) 平成 22 年 3 月 29 日に、ワーキンググループ 6 名で集まり、第 1 回の賀茂文化検定委員会の開催について協議し、4 月 16 日に上賀茂小学校のふれあいサロンと決まった。ジュニア上賀茂検定は賀茂文化検定委員会の一つの行事として行うこととなった。ジュニア上賀茂検定への委員の関心は高く、自分たちも上賀茂について勉強する必要があるとの提案が出され、定期的に勉強会を開くこととなった。まず、上賀茂町並み保存会との共催で市の文化財保護課に「社家町と社家住宅」で講演を依頼することとなった。同族会からも理事長の顧問と協力団体の就任の承諾の文書がきたことを報告した。
- 24) 平成 22 年 4 月 16 日に、第 1 回の賀茂文化検定委員会を上賀茂小学校ふれあいサロンで開催した。自治連合会関係者 7 名、上賀茂おやじの会から 3 名、上賀茂小学校学校運営協議会から 1 名、上賀茂小学校から Y 校長、上賀茂神社の T 氏と著者の合計 14 名であった。これまでの経緯を説明し、委員会規約、役員、ジュニア上賀茂検定の対象学年、実施時期、検定対象候補地、検定内容、検定委員の勉強会(講演会)などすべての内容について合意が得られた。上賀茂発見ラリーについては、7 月か 10 月に実施してもらいたいが、授業の進み具合などを勘案して、今後連絡をするとの提案が Y 校長からあった。上賀茂小学校、自治連合会、賀茂文化研究会の三者の協力体制ができた。顧問には、田中安比呂賀茂別雷神社宮司、西池成晃同族会理事長、廣岡正久京都産業大学理事長、Y 上賀茂小学校長、著者の 5 名で Y 校長以外は全て著者が依頼して了承を得た。委員長には、自治連合会会長の I 氏、副委員長には自治連合会の H 氏と著者になった。協力団体には、京都産業大学をはじめ著者らの賀茂文化研究会、自治連合会、同族会、子供たちの教育にかかわる組織の PTA、上賀茂小学校学校運営協議会、上賀茂おやじの会など上賀茂地域の主要な組織を網羅して編成した。なお、賀茂季鷹歌碑建立や北大路魯山人人生誕地石碑建立で常に「車の両輪」(自治連合会役員の言葉)



として一緒に活動してきた上賀茂社会福祉協議会は、平成21年の自治連合会の会長交代以降から両者の関係は分裂しており声をかけないこととなった。地域の無用のトラブルに巻き込まれるだけなので、この件に関しては著者は関与しなかった。勉強会は、平成22年6月17日に「明神川の水系と庭」との題で市文化財保護課のI氏を講師に、上賀茂会館で実施することとなった。今まで、「動きの鈍い上賀茂」と京都市が言っていた上賀茂地域からの申し出に、京都市も積極的に協力してくれることになった。京都市との交渉や準備など全般を自治連合会が行なうこととなった。これらの一連の動きの中で、著者らの賀茂文化研究会に自治連合会の数名が会員となったが、1名を除いて他は1年後には会費の納入もなされなくなった。著者と自治連合会との関係の変化が原因と推定される。

- 25) 平成22年5月19日に、Y校長から上賀茂発見ラリーやジュニア上賀茂検定などの一連の日程がメールで送られてきたが、前もって無理な曜日と伝えてあった曜日に組まれており、実施困難と電話で伝え再検討してもらおうこととなった。Y校長が3年生の学年担当に我々の曜日の都合を伝えていなかったことが原因であった。Y校長と学年担当との意思疎通の不十分さで、その後も混乱を生じたため、Y校長は多忙なためYn教頭を担当にしてその後の打開を計った。
- 26) 平成22年5月28日に、ワーキンググループの6名とおやじの会の1名で集まった。Y校長からの上賀茂発見ラリーの具体的な提案を検討した。やすい堂は遠いと担当教員から意見が出ているということであったが、地元の町内の関係から近い方だけにしないわけにはいかないのでも承してもらう方向で話をするようになった。3年生が前もって学習した内容と学習していない内容について、各地点で地元の方の話を聞いて回答するようにしたいなどであった。Y校長からは、9月の行事としては体育館に何か所かのコーナーを作って、競馬やさんやれ祭、里神楽などのビデオを見せながら地元の方から説明を受けたいとの話があった。ところが、ビデオを編集作成する技術を持った人はおらず、著者が試みることとなった。ビデオのソフトの載ったパソコンの台数を揃えることも少々困難のようであった。各地点の説明文は、自治連合会のH氏と著者で作成することになったが、結局は著者一人で作成する結果になった。また、北区のフォローアップ事業の助成を申請したとのことであったが、どこで決まったのかはわからなかった。各地点の説明は、自治連合会の役員で人数は対応できると考えられるが、足りなければ他団体にも応援を頼むこととなった。
- 27) 平成22年6月17日(木)に上賀茂会館で講演会(勉強会)を開催した。平日の昼間であったにもかかわらず、関心は高く50名の予想を超える80名の参加者があった。委員のみならず地域の意気込みが感じられた。ただ、有料(500円)のN家庭園に無料(自治連合会からお礼を出している)で入れることや、日頃は入れないT家やH家の個人の庭園に入れることも関心と呼んだことである。この場でもジュニア上賀茂検定の説明と上賀茂発見ラリーへの協力をお願いした。(写真2、写真3)
- 28) 平成22年4月から3年生は地域に実際に週に2回入り学習して、疑問に思ったことや不思議に思ったことわからないことなどをメモにした。これを12地点について2~4つの質問にまとめたものを6月1日にY校長からE-メールで著者が受け取った。たとえば、上賀茂小学校の正門につい



写真2 講演会(勉強会)



写真3 庭園見学

て、なぜこんなに古いのか、どうして木でできているのか、いつ作られたのかや、神様は本当にいるのかなどである。3年生では注目してほしいことになかなか気が付いてくれず、ある程度誘導せざるを得なかったとのことであった。すなわち3年生にとって、いつも見慣れた当たり前の風景であり、その他は知らないから注目しないということであった。

29) 平成22年6月18日に、上賀茂小学校でY校長とワーキンググループで協議し地域として是非知ってほしいことを加えて合計15地点を決めた。問題となったのは穂根東児童公園のすぐきの碑であった。他の地点と場所が離れておりわかり難く夏の暑い日に歩くことに著者は難色を示したが、すぐきは上賀茂の農家の特産であるので是非入れたいとのH氏の意見があり採用することとなった。なお、平成23年度はやはりこの地点は廃止した。

30) 15地点について著者が写真、説明文および3年生の質問への回答を作り、A3ノビの写真と説明用紙と、質問への回答のA4用紙をそれぞれラミネート加工したものを作成した。たとえば、北大路魯山人生誕地石碑では、魯山人の写真、製作した器と料理などの写真と魯山人がどういうことをした人なのかの説明文などである。上賀茂発見ラリーまで1か月足らずの間に、写真を撮り、説明文や質問の回答などを作製しなければならず大変な作業になった。とくに、3年生でもわかる文章にするのは慣れていないために苦勞の多い作業であった。本来は著者が普通の文章を作成し、小学校の3年生の担当教員がやさし文章に直すことになっていたが、時間的に無理であったため著者が作成した。また、時間的に追われることとなったために、地元住民に助言しながら協力してもらうことが出来なかった。3年生くらいは率直であり「神様は本当にいるの」などの難問の質問もあり、逃げるわけにはいかず回答に苦勞をした。これらのことが後々、何でも面倒なことは著者にやらせておけばよいとの風潮を作り出してしまうことにもなってしまった。

31) 平成22年6月24日に、上賀茂小学校ふれあいサロンで、上賀茂発見ラリーの地点説明講習会を開催した。検定委員だけでなく、ラリー当日に協力してくれる方々に声を掛けて集まってもらった。80歳前の入退院を繰り返しておられる方までが手伝うとあってこられたが、暑い日中になる恐れもあり大丈夫かと心配することもあった。ラリーの概要と各地点での作業を説明し、各地点の担当

者を決めた。賀茂季鷹歌碑は社家のために担当者の引き受け手がなく、著者が大山崎におられる子孫のY氏にお願いすることとした。社家のことになると全く手が出せなくなるのが農家関係者の実情である。

- 32) 平成22年6月29日に、前もってY校長に質問していた事項についての回答があった。①各地点の担当者が安全確保のこともあり3年生がいつごろ来るかを把握し、3年生が各地点を回るルートを教えてほしいとお願いし、7月8日がラリーなので7月早々にはほしいとお願いし、了解したとの返事であった。しかし、8日の数日前になってもルートはこなかった。ジュニア上賀茂検定およびラリーに対する考え方の相違があり、小学校はただ単に各地点で地元の方が説明してくれたらよいと考えているが、著者らはこちらから提案したものであるから、全体像を把握しておいて万全を期したいと考えていることとの行き違いが生じていた。Y校長としては、3年生の担当教員の自主的な活動としないと教員のやる気が起こらないことに配慮して、教員にできるだけ任せておきたいと考えているようであった。たとえば、地点番号も何も連絡がないので地域の位置順に地図に番号つけていたが、小学校では3年生に持たすプリントは異なる番号を振ってあって混乱が生じることとなった。意志の疎通が不十分であったわけであるが、小学校、とくに3年生の担当教員は上記のようにただ地点で説明してくれるだけと理解していたようである。一方、著者はY校長から6月1日に「夏休み明けぐらいに3年生でも読んでわかるような、簡単な参考本でもあればと考えています。」との連絡を受けており、また「勝手なお願いばかりで申し訳ありませんが、あくまでも先生(著者)のお考えに従いながら進めていきたいと考えておりますのでよろしく願いいたします。」とのことで、その積りで準備しだしていたわけである。基本的な考え方の違いがあり、著者はどのような役割であれ、それぞれが全体像を把握し、その役割の意義・位置づけを知っていることが大切であり、またそれがやりがいに通じると考えており、全員にすべてを説明しておきたいと考えている。使い走りでは人は育たないわけである。一方、Y校長は単に各地点で地元の方が説明してもらえればよいと考えているわけである。②3年生90名が18班(5名)に分かれて保護者1~2名がついて順に各地点を2時間かけて回ることが分かった。その他、出発時刻、終了時刻、各地点でも採点方法などについて連絡を受けた。最後にY校長は次のように書いていることから上記のことが理解できる。「ジュニア上賀茂検定に向けての取り組みの一環でもありますが、教職員への説明の都合上、今回は、総合的な学習の時間に地域の方々がたくさんお手伝いいただけるというスタンスでお願いできればありがたいです。」
- 33) 平成22年7月8日の数日前になっても、3年生が各地点を回る順がこないで、H氏と相談し、急いで回り方の案を作成して小学校に持って行ってもらったが、後日、3年生の各クラスで自分たちで作っていることがわかり、その順で回ることとなった。
- 34) 平成22年7月8日に、上賀茂発見ラリーを実施した。晴天に恵まれ、暑すぎる日であったが、雨が降らずにほぼ順調に実施できた。地元住民約40名、保護者約30名の合計70名以上の協力があつた。子供たちは5名一組で保護者に引率されて各地点を約2時間をかけて回り、あらかじめ与

えられていた質問について各地点で教えてもらった内容から回答をした。著者は、自転車で各地点の様子を見て回った。説明の住民も子供たちに説明をするという主体的な活動であり、また子供たちが熱心に聞くので、活き活きと話をしていたのは印象深いものであった。保護者からも、上賀茂でこんなところを初めて知った、地元のことがわかってよかった、勉強になったなどの声を聞くことができた。また、「おさよさん」と呼ばれている社で



写真4 お参りする子どもたち

では、説明を聞いた子供たちが誰に言われることもなく次々とお参りして手を合わせているのには感心した。これが自然な姿なのであろう。(写真4)なお、小学生と保護者は小学校の学習の一環であるので保険があるが、協力する地元の一般住民は保険がないので、著者が全員の保険に加入した。

ただ、当日に誘われて参加した元小学校校長という人から2つの批判が出された。①「子供たちへの押し付けではないか」。これについては、4月から子供たちは総合学習の一環で地域に入り疑問に思ったことや興味をもったこと、不思議に思ったことなどをまとめたものを主体に、それと地元がどうしても知ってもらいたいことを追加して地点を決め、疑問などへの回答の説明をしているもので、決して押し付けなどしていないと述べた。②「こんな暑いときにして」。これについては、上記のように子供たちが地域を回り疑問などを探すのに時間がかかり、そのために時期が遅くなってしまうのであると答えた。このような上賀茂発見ラリーが押し付けというのであれば、学校で教科書を使ってやっている教育はすべて押し付け教育ではないだろうか。(図1)

- 35) 平成22年7月9日に、Y校長とE-メールで意見を交換した。①すぐきの碑がやはり遠すぎることにその変更内容、②やすらいの花傘をだしてもらったり、夜泣きの神様の社を開けてもらったり日頃は見られないことをしたのがよかったこと③N店の門を説明の住民が無断で占拠してしまってトラブルになるところだったことなどで来年への課題であった。なお、Y校長から「昨日は、本当にありがとうございました。子どもたちは勿論、担任をはじめ保護者の方々も大変喜んでおられました。」とのお礼をいただいた。
- 36) 平成22年7月16日に、ワーキンググループで反省会を開いた。一番の問題は、3年生の担任教員との連絡が不十分であったことで、この辺は小学校の事情もあり今回で様子もわかったので状況は改善されるだろうとのことになった。



図1 京都新聞(平成22年7月9日)

- 37) 平成 22 年 7 月 23 日に、上賀茂小学校で Y 校長とワーキンググループで反省会をおこなった。新たな問題点は出てこなかった。上賀茂発見ラリーは現実には存在するものを、その地点で説明したが、伝統行事や祭りに話が及んだ。9 月 2 日には、やすい踊り、里神楽、紅葉音頭などの伝統行事などの映像を見せることになったが、誰も自分がやるとの話はなく、いわば勝手な発言ばかりであり、著者は「よいことだが、誰がやるのか。」と発言したら、みんなは黙ってしまった。結局、技術のある著者が準備せざるを得なくなったが、冊子の作成などがあり、さすがに時間的に全部の完成は無理で賀茂競馬のみほぼ完成させることが出来た。
- 38) 平成 22 年 8 月 12 日に、上賀茂小学校ふれあいサロンで上賀茂発見ラリーに協力してくれた方々全員で反省会を行った。盆の前であったこともあり、既に終了したことでもあったので参加者は 10 数名で少なかった。特に新たな意見はなかったが、著者が作った各地点の写真の裏につけた説明文が有難かったとの意見があった。
- 39) 9 月の新学期に間に合わせられるように上賀茂発見ラリーで作成した写真と文章をさらに増補して 21 頁の冊子「私たちの上賀茂」<sup>7)</sup>を著者が作成し、3 年生に配付してもらった。協力してくれた地元の住民や関係者にも配付した。印刷は自治連合会、製本はワーキンググループの地元の製本屋さんがボランティアで、表紙のカラー印刷のみ業者に依頼した。
- 40) 夏休みを利用して、ビデオ映像の編集をおこないある程度の目途もついてきた。9 月 11 日に上賀茂神社の田中宮司に上賀茂神社が作成したビデオ「上賀茂のひととせ」の映像の一部を使わせていただきたい旨お願いし了承をえた。映像は編集できても、説明文まで書き込むことは時間的にも難しくなってきたので、ワーキンググループをはじめとする自治連合会にやすい祭、さんやれ祭などの農家中心の祭についてそれぞれ 2~3 分の説明をお願いしたいと依頼したところ、引き受け手がなかった。実際に祭はやっているが説明となると困難のようであった。Y 校長に相談し、映像を見せることは今年は時間的に困難であることなどの事情を説明し中止の了解をえた。社家が行っている競馬については、ほぼ完成していたので Y 校長に CD を渡し、適宜利用してもらうことにした。
- 41) 9 月からジュニア上賀茂検定の問題作りを始めた。ワーキンググループの F 氏がたくさんの問題やテーマを作ってくれたが、ほとんど役に立たないものであった。Y 校長が冊子を基にして 33 問の原案を作成し、E-メールで送ってくれた。Y 校長はもともと社会が担当であったので、問題と選択肢の答えの作り方が上手なものには感心した。しかし、上賀茂地域については素人なので重点を置くべきところがわからず出題内容は必ずしも適切ではないものもあった。この点について 11 月 4 日に Y 校長と会い説明をし、その後、E-メールで何度もやり取りをして 11 月の検定の一週間前によく問題を完成させた。印刷のための原版は著者が作成し、印刷は小学校がした。
- 42) 平成 22 年 11 月 18 日に、上賀茂小学校体育館で学習発表会が行われた。全校生徒の前で、3 年生が上賀茂発見ラリーを基に子ども役、賀茂文化研究会の役、ナレーター役などに分かれて劇や写真の紹介、発表をすることのであった。子どもたちからの招待状をもらい、参観したかったが日

程の調整がつかずに見学できなかった。子供たちの進み具合にあわせて日程が決まるので、前もって日時が決められず連絡が遅いので大変残念であった。

43) 平成 22 年 11 月 22 日に、上賀茂小学校でジュニア上賀茂検定が実施された。3 年生 90 名の内、8 名が満点、平均が 90 点という優秀な成績であった。

44) 平成 22 年 12 月 24 日の終業式の日、小学校の朝会で全員に認定証が渡された。著者らも Y 校長も成績によって数段階の等級をつける積りであった。中級、上級に進む一定の基準を作るべきと考えていたが、3 年生の担当の先生方が「上賀茂ではみんな平等に表彰することになっている」として反対したので、全員に認定証をわたすことになった。Y 校長からも、努力した子供たちとそうでない子供たちが同じというのは平等という不平等ではないか、前任校では毎週子供たちの良いところを見つけて表彰していたのにとの E-メールをもらったが、口出しできないことであった。確かに、担任の先生の熱心さの影響であろうか、3 つのクラスで成績が明らかに異なることも理由と思われる。

#### 4. 考察

小学生、担当の先生、協力した地元住民まですべてに好評であった。新住民の若いお母さん方や上賀茂に嫁いできた若いお母さん方に、上賀茂ってこんなところなのと強いインパクトを与えることができた。地域への関心も高まったと思う。説明にあたった地元の住民も案外地元のことを知らないもので、勉強になったとの声が多くあったのも意義があった。

しかし、次のような問題点も明らかになった。

- 1) 3 年生では、具体的な対象物のあるものや、あるいは写真で示せたものについてはよく理解できたが、抽象的な言葉での内容については理解が困難であった。たとえば、上賀茂神社はいつ頃できたかなどである。
- 2) 地元リーダーを育てたいと思うので、少しでも地元の住民が主体的に取り組めるように計らった。しかし、説明文や質問への回答など具体的な作業になると小学校の日程にあわせなければならぬという時間的な制約と、作業内容が地元住民では困難であることから著者が行ったが、結果としてこれが難しい面倒なことは著者のやらせておけばよい、自分たちは口だけでよいとの雰囲気は地元住民に見え隠れするようになってしまった。住民と協働してやるとの姿勢が住民との距離を近くしすぎて住民組織の一員になってしまい、委員会などの日程の調整までも著者がしなければならなくなり、住民の自主性を育てることが出来なかった。本当に大切なことは何をするかではなくて、その行事などを通じて地域にリーダーを見いだせるか、あるいはリーダーを育成できるかが行事の継続と地域の活性化のポイントである。今回の方法が悪かったのか、住民側がそれだけの意識・能力がなかったのか、これが一般的な状況であるのかなどは今後の検討課題である。最初に役割分担や作業分担を明らかにするとか、ある時点で協定書を交わすなどが必要であったとも言えるが、何が起こるか将来の見通しが立たなかったことや小学校との関連も手探りであったことも今回の状況

を作ったといえる。

## 5. おわりに

ジュニア上賀茂検定は京都検定をモデルにした上賀茂地域のご当地版である。実施まで2年以上かかったが、予想以上の成果をあげることができた。地域の中に居住しては中々動き難いことや思いつかないこともあり、魅力あるアイデアを提案できるかが大切である。ジュニア上賀茂検定も地域では誰も発想には至らなかった。魅力あるアイデアで多くの人を引き付けることが地域活性化の第一歩である。しかし、地域の活性化とは本来は人を育てることであるが、今回もそうであったようにリーダーの育成など人を育てることは至難の技で一朝一夕にできないことを改めて認識させられた。

中級編、上級編などの今後の展開方法については思案している。むしろすべての資料を作成して小学校に提供し、小学校が独立してやれるようにすることも考えられるが、これも校長が代わると継続が困難になる場合が多い。たとえば、学年担当ごとの引き継ぎも不十分で、著者が苦勞して作成した写真や説明文のラミネートをした用紙も小学校が預からせてほしいということで渡したが、3年生のロッカーの上に放置したままで引き継ぎが行われず平成24年度の新3年生には使えなかったという状況であった。今後、ジュニア上賀茂検定を上賀茂小学校や地元住民が自主的に推進できるのか、そのレベルや熱意も見極める必要がある。

ジュニア上賀茂検定を実施するにあたっては、多くの地元住民などの方々にご協力をいただいた。ここに記して感謝する。なお、本研究は京都産業大学総合学術研究所(課題番号：E1015)および科研費(課題番号：19510051)の助成を受けた。

## 参考文献

1. 上賀茂校百年史編纂部会編「上賀茂校百年のあゆみ」、上賀茂小学校、1973.2
2. 勝矢淳雄「季鷹も居住した社家屋敷と社家町での環境学習活動」、賀茂文化、第4号、44～53、2007.4
3. 森谷尅久監修、京都商工会議所編「京都・観光文化検定試験公式テキストブック」(増補版)、淡交社、2010.4
4. 勝矢淳雄「住民との協働によるジュニア上賀茂検定に関する考察」、環境衛生工学研究、第24巻、3号、67-70、2010.7
5. 勝矢淳雄「北大路魯山人人生誕地石碑建立における合意と反対に関する考察」、環境衛生工学研究、第23巻、3号、192-195、2009.7
6. 勝矢淳雄「上賀茂地域の活性化を目指した住民との協働に関する研究」、京都産業大学総合学術研究所所報、第6号、21～38、2011.7
7. 勝矢淳雄「わたしたちの上賀茂」、賀茂文化検定委員会、2010.9

# Study on the Junior Quiz at Kamigamo in Partnership with Inhabitants aimed on Activation at Kamigamo Area

Atsuo KATSUYA

## Abstract

It was almost performed without connection with the education of the elementary school and the local inhabitants conventionally. Time for General learning began, and the learning about the local matter came to be adopted in the elementary school, too. The Kamigamo area has the history more than 1,300 years, and there are many traditional events and traditional culture. There is few at an opportunity to know the Kamigamo area for the inhabitants who lived in newly at Kamigamo area and the young generation who married into Kamigamo area. Furthermore, new young inhabitants have difficult participation for the traditional event from old times physically and mentally. It is children carrying the next times that require to know most the area as well as new young inhabitants. It is necessary for children to know early Kamigamo area. And children must have attachment at Kamigamo area.

Under these background, we carried out the junior Kamigamo quiz for the children of the Kamigamo third grader. As a result, the junior Kamigamo quiz was favorably reviewed with all to children, teachers, young mothers of the protector, the local inhabitants who cooperated. They felt that they knew Kamigamo well. We were able to give young mothers a strong impact about Kamigamo area. We think that the interest in area of young mothers rose. It was very impressive for me that the local inhabitants who cooperated were explained positively. The local inhabitants do not know Kamigamo area unexpectedly, too. It was important that there were many voices that it was studied by inhabitants. The junior Kamigamo quiz was able to give result more than expected.

It is the first step of the activation of area to attract many people for such effective idea. However, there is whether the really important thing can find a leader through the events. Or there is whether we can bring up a leader. This is an important point for the continuation of the event and the activation of area. It was so this time, it was the most difficult skill to bring up the person including upbringing of the leader, and I was made again to recognize that it was not possible easily do it.

**Keywords:** Kamigamo Area, Junior Kamigamo Quiz, Activation of Area, Community Contribution Movement, Cooperation with Inhabitants